

父親の祈りと、お風呂いっぱいの水

子供たちは、戦争の経験もなければ、社会の巨大なインフラを動かした経験也没有。しかし「身体的シミュレーション」という視点からそれぞれの姿を見つめ直すと、国語科の文学的な読みの深まりと、社会科における社会事象の探究には、子供の「経験」という点で共通性が見えてきました。

国語科において、子供たちは「ふつうゆみ子を見つめるが、花を見るということは、そこにお願いが込められている」と、自らの視線を登場人物に重ね合わせて父親の祈りを受け取っていました。さらに「戦争中一つの花だが、平和な場面ではたくさんの花が咲いている。花で平和を表していると思う」と、教科独自のアプローチである【対比】を働かせ、作品の心に迫る姿がありました。

これと重なるように、社会科では、「自分たちの手でろ過するとお風呂いっぱい分量はどれくらいかかるのか」と振り返っていました。自分たちが実際に行きたる過の手間や時間という枠組みから、毎日入っているお風呂という馴染みのある身体的経験へとシミュレートし、巨大なインフラを自分なりに想像しようとする姿の表れだと思いました。ここで注目したいのは、どちらの教科においても、学習の過程で築き上げた身体的な経験や発見が、子供たちの中で新たな「基礎的スキーマ」へと組み込まれ、学級共通の財産となっていた点です。



真剣勝負の場をひらく

今回は珍しく？パッションを伝えます。

今朝、玄関に立って挨拶をしていると、ある児童が「いつもいる〇〇先生は？」と尋ねてきました。「〇〇先生は研究授業の準備をしていると思うよ」と伝えると、その子は「そっか、今日研究授業だもんね！」と、嬉しそうに納得して教室へ向かいました。子供なりに、教室に満ちる研究授業への熱量や意気込みを敏感に感じ取っており、「教師と共に、今日の真剣勝負の場をつくりあげるんだ」という気概が子供の側にもあふれていることが感じられた朝のスタートでした。

一つの研究授業を行うにあたり、授業者はもちろん、教科部でもシナリオを練り上げていきます。周囲の先生方は、子供たちだけで学びに向かう土壌を築き、自習の時間を支えています。文字通り、全職員の尽力によって本校の研究は成り立っています。だからこそ、今回はいま一度、年度当初に全員で確認した【研究に向かう心構えと作法】を想起したいと思います。授業者への労いの気持ちは大切ですが、我々が交わすべき言葉は、尊い実践と子供の姿を提供してくれた先生への敬意を込めた、「(授業を提供していただき) ありがとうございます」です。完璧な授業がないからこそ、お互いに知恵を出し合い、前人未踏に挑戦する仲間と議論を交わす。そうした温かくも真剣なチームワークの第一歩が、この「ありがとうございます」という言葉に込められているように思います。

まもなく研究の第一シーズンを終えようとしています、ここからは11月の研究発表協議会に向けた次のフェーズへと向かっていきます。これまでの各教科部での素晴らしい実践を発信へとつなげていく、重要なフェーズの始まりです。我々は前人未踏を子供の姿で明らかにする使命を担っています。互いへの確かな敬意(ありがとうございます)を抱き、誇りをもって子供と教師が共創する真剣勝負の学びの場を公開するという気概を抱いて、いま一度、チーム滋賀附属で一丸となって研究を盛り上げていきましょう。(木村 仁)

